

荒ぶる神々による洗礼^{せんれい} ～神宿る森での怪異譚^{かい い たん}～

自然・環境マネジメント研究部 環境計画研究グループ 大平 和弘



■神宿る森の調査にあたり

鎮守^{ちんじゅ}の森や祀^{まつ}られた大樹など、人々は自然を畏れ敬い、神を宿らせ、自然に寄り添って暮らしてきました。九州から沖縄の神宿る森を対象に、なぜ、どうやって地域で守り続けられてきたのかを調査することで、人と自然の共生のあるべき姿を探っています。このような神宿る森は、木の伐採^{ばっさい}はおろか、立ち入るだけでも災いや不幸などの“祟り^{たた}”が生ずると伝わる地も多く、調査は文字通り“命がけ”です。

■不可解に墜落^{つらく}するドローン

南九州のよく祟ると伝わる森での話。調査隊のA氏が森を空撮^{くうさつ}するドローンを飛行させたところ、森の手前で墜落して壊^{こわれ}れました。あとから考えると、調査に立ち入るための拝礼前に飛行したため、神の結界に触れたのかもしれません。



墜落前のドローン

■神隠しにあった野帳^{やちょう}

祀る人がなくなった神の森での話。鬱蒼^{うつそう}とした森に分け入った時、調査隊のB氏が香炉^{こうろ}（森の拝む所）があったであろう場所を誤って踏んでしまったようです。その直後から、B氏の野帳（データを記録するノート）がこつ然と消え、来た道や森の周辺を、地元の方にも手伝っていただき、大搜索^{そうさく}しましたが見つかりません。同行した民俗学者は、「これは祟りにちがいない」と、再び森に入り、「神様許して、悪さしないで」と大声で拝礼をくり返しました。そして森から出ると、大搜索したはずの道端の良く見える場所に、野帳がポツンと置かれていたのです。祀られなくなっても、今なお大いなる力を宿す神の存在を感じざるを得ない貴重な体験となりました。



決死の覚悟で森に分け入る調査隊